参勤交代に使う江戸藩邸に暮らす中級・下級の武士も長屋に住んだ。その長屋は藩邸の外周に配置され、守備の役割を担っていた。江戸庶民の長屋は六畳間ほどの畳と板の間と台所を兼ねた土間で構成されていて、十から二十戸集まっていた。中二階を持つ長屋もあり、経済事情でさまざま使い分けていた。店の主人でもない限り、庶民の暮らしはほとんど長屋で営まれていた。日本における長屋の存在は、極めて重要だったのだ。

●六根清浄（富士詣り）

登山に使う六根清浄は仏教の言葉である。現代ではさしずめ「さぁ！元気を出して」や「ファイト！」とでも言おうか。また、体調不良時に心を落ち着かせるために医者が、ゆっくり深呼吸をさせながら「大丈夫、新鮮な空気が身体中を巡っている」や「正常に規則正しく脈打っている」と声に出して言うことと、同じようなものだ。六根は、見る、聞く、嗅ぐ、味わう、触れるが五根で、そこにあらゆる精神活動を司る「意」を加えたものだ。仏教では、認識作用の対象（対境）を境（きょう）といい、認識する感覚器官とその働きを合わせて根（こん）という。単なる身体の一部（眼、耳、鼻、舌、身）とは区別している。この六根の穢れを払って、心身共に清浄になることを六根清浄という。つまり辛い時にこの言葉を発し、自身に暗示にかけて、乗り越えようという訳だ。

●回向院（猫定）

この噺は播州（現在の兵庫県加古川辺り）を舞台とした『赤壁明神の由来』という講談とほぼ同じである。おそらく江戸時代の噺家が、赤壁明神を回向院に置き換えて語ったと思われる。回向院は墨田区にある浄土宗の寺だ。元々の号は諸宗山（国豊山）無縁寺という。号が変わったのは明暦の大火（一六五七）の時だった。幕府は犠牲者（焼死・昏死）十数万人の霊を回向するため、本所牛島新田に五十間四方の土地を下付し、そこに遺骸を集めて埋葬した。回向は仏教語で、この場合は「死者の冥福を祈って読経をし、念仏を唱え、供えをすること」「供養、たむけ」の意である。この追善法要で増上寺二十三世遵誉上人が導師に任ぜられ、一山（日本禅宗二十四派のひとつ）大衆を率いて行なった。噺に出てくる猫塚は大火で焼死した多数の猫の遺体を弔ったもので、回向院に現存している。

次回予告

第 654 回

12月23日〈金〉よる6時開場／6時30分開演

ぞろぞろ ◉ 三遊亭ごはんつぶ
お見立て ◉ 春風亭一之輔
穴どろ ◉ 柳亭市馬
蛙茶番 ◉ 三遊亭小遊三
お富与三郎発端 ◉ 隅田川馬石

公演予定　2023年 1月25日〈水〉/2月24日〈金〉/3月24日〈金〉/4月17日〈月〉

▣ 当世噺家気質　その237・柳亭小燕枝と「禁酒番屋」

今月上旬、春風亭一蔵、市弥改め柳亭小燕枝、小辰改め入船亭扇橋の50日間に及ぶ真打披露興行がめでたく千穐楽を迎えた。

一蔵は毎日ネタを替えた。扇橋は怯むことなく大作に挑んだ。そして小燕枝は、トリの高座の後、赤いステテコに鉢巻き姿で、陽気にカッポレを踊って自らの祝いに花を添えた。

披露目興行で小燕枝が一番印象に残ったのは、師匠柳亭市馬が弟子の高座を聴いて驚いていたことだ。

「今日は何をやるんだ？」「はい、○○をやります」「そんなのできるのか、お前！」「師匠、『できる』と『やる』とは違いますよ」

市馬は、舞台袖で小燕枝の噺に耳を傾け、「あいつ、こんな噺、持ってたのか」と感に耐えたようにつぶやいた。

「師匠が弟子の噺を聞く機会なんかありませんよ。私たち弟子は、師匠の会では〝安全牌〟しかやりませんから」

小燕枝は、上野鈴本演芸場での最初のトリで「猫の災難」を演じた。

「その時、『こいつの猫災（「猫の災難」の略）は合格です』と言ってくれたんです。師匠はたまーに褒めてくれるんだけど、まだ披露目が始まったばかりだから、励みになりました」

披露口上での幹部連は、小燕枝を「愛嬌がある」「愛想がいい」と評した。そうそう、「酒癖が…」という声もあった。

「ええ、みんなから言われます。とりわけ日本酒は相性が良すぎるから、披露目の前から控えています」

噺に登場する酒飲みたちが、他人とは思えない。「猫災」はもちろん、「試し酒」「夢の酒」「棒鱈」「二番煎じ」と、披露目では酒のネタをよく掛けた。

「禁酒番屋」は、浅草演芸ホールの４日目に演じた。二ツ目になりたての頃、師匠市馬に教わって以来、大事に育ててきたネタだ。

5年前の夏、一蔵、扇橋（当時は小辰）と長く続けている「新版三人集」で、市弥の小燕枝が「禁酒番屋」を掛けることになった。その日の昼、横浜にぎわい座の「柳亭市馬独演会」の楽屋でその話をしたら、市馬は「よし、ここ（にぎわい座）でやってみろ」と言い出した。いきなりのネタ試験だ。

「師匠の独演会で弟子がやる噺じゃないでしょ。僕は滑舌が良くないので、何か意識すると噛んじゃう。もう、噛むのを前提に喋るしかないなって」

開き直りが功を奏したか、市馬審査員の判定は「あれだったら、いいかな」だった。

ところが、師匠のお墨付きをもらった「禁酒番屋」が、その後だんだんウケなくなった。

「結局、大師匠の五代目柳家小さんの型がいいとか、ここは師匠市馬のスタイルでか、そんなことばかり気にしてたんですね。下手でもなんでも、しゃべっているのはこの俺なんだと思ったら、ようやく高座が落ち着きました」

先人の呪縛から解き放たれた小燕枝流「禁酒番屋」。まずは酒豪オリジナルの酔態から味わおう。

（長井好弘）

第六百五十三回

落語研究会

日時●令和四年十一月三十日《水》よる六時三〇分開演

会場●国立劇場《小劇場》

主催●TBSテレビ

《演目》

つづら泥 ● 入船亭遊京

禁酒番屋 ● 柳亭市弥 改め 柳亭小燕枝

安兵衛狐 ● 古今亭志ん輔

《仲入》

富士詣り ● 三遊亭萬橘

猫定 ● 五街道雲助

三味線 太田園子　笛 三遊亭わん丈

松尾あさ子　太鼓 柳亭市童

前座 入船亭扇ぱい

新・落語掌事典（二三三）　田中優子

●つづら（つづら泥）

この噺はまさに、ギリシャ神話「トロイアの木馬」の落語版だ。木馬ならぬ「つづら」は葛籠と書き、葛藤（ツヅラフジ）で編んだ、蓋付きで箱形長方形の籠である。昔話の「舌切り雀」に登場するので年代層に限りはあるが、ご承知の方は多いはずだ。衣類等を入れて蓋を被せて使用した。押し入れや箪笥の無い長屋では、収納や運搬に重宝だったに違いない。編んだ籠の表面に紙を貼り、渋や漆を塗って内容物の保存度を高める工夫が施されている。一六〇〇年代末には竹や桧の薄板を材料にした物も作られ、金紋や蒔絵などが施された万年葛籠が登場する。神田鍋町の、つづら屋甚兵衛（仁兵衛）が作りはじめたと言われていて、当時の婚礼道具のひとつにもなったようだ。現代では材料が安価な石油製品が主流になり、日常生活から消えてしまった。

●関所（禁酒番屋）

上方では、この演目を『禁酒関所』という。武家屋敷に番屋という建物は存在しない。町中には辻番屋があり、警備のために木戸の開け閉めをする「自身番」が交代で詰める。自治の基本であり、家主をはじめとする町人たちが自ら役目を果たした。それをわざわざ屋敷の門前に設けて酒を監視するのであるから、お殿様は相当本気だ。「関所」ももちろん屋敷には存在しない。こちらはさらに大仰な話だ。関所は手形があれば通れるが、それがなくて関所破りをすれば磔の刑が待っている。番屋や関所をつくる目的は、規則によって集団生活や社会生活の平穏無事を守るためだ。しかし規則は必ず破られる。破った者には罰則がくだる。罰則は抑止力にも繋がる。しかしこの噺では、それを守らせる側の役人が酒を飲んでしまう。規則の建前と本音が交錯する噺である。

●長屋の歴史（安兵衛狐）

この噺は「六軒長屋」が舞台だ。その中の二人がほぼ同時に女房をもらったことに他の四人が不審に思う。長屋の人間関係が噺に生きている。ところで長屋は奈良時代からあった。僧坊が長屋だったのだ。平安京の庶民の住居も長屋である。中世末の京都でも、長屋はかなり一般的なものだった。江戸時代の下級武士は組単位で長屋に住んでいた。

（裏面へつづく）